

夜行性動物とサファリ

夏の風物詩、〔お化け〕は決まって夜現れる。暑く、暗いところに出没するところがミソである。〔お化け〕は暗黒の中で本領を發揮する。野生の猛獣も然り、闇の中でこそその真髓を發揮する。

野生動物の生態を観察しようと思ったら、‘百獣の王’ライオンや、‘駿足’チーターの本領發揮は炎天下ではまったく期待できない。ケニア・サヴァンナの昼日中にサファリカーで、彼らの住処を訪れても彼らは昼寝中で、エンジンを噴かせたところで見学者をじろりと眺め、頭をもたげて存在をアピールするだけである。彼らにとっては迷惑千万なのである。

それが‘夜行性’の猛獣の行動本能を手荒に見せてくれるのが、南アフリカのサファリツアーで、日没とともに出かける。人間がライオンと一帯感を持ち、小さな獲物を狙うわけである。獲物の風下から飢えたライオンとともにランドクルーザーで、野うさぎや、ガゼルのような弱い生き物を追う。10人乗りのクルーザーの最後部には、ライフルを構えた屈強なガードマンがでんと座っている。客は囲いのない、無防備な車の中で怯えながらスリルを満喫？させてもらえる。伸ばせば手の届く距離にライオンが車と平行して歩いている。‘もし、そのライオンに襲われたらどうすればいい？’と件のガードマンに聞くと、涼しい顔で‘襲われたままじっとしている。必ず撃ち殺すから’と平然と答える。夜行性猛獣の実態を知り、スリル満点ではあるが、野生動物の国は人間も猛獣並の荒っぽさである。

(近藤)